捨てる神あれば拾う神あり

長澤　奈緒子

遅咲きの選手として、二〇〇六年に地方紙に記事が掲載された。カナダで行われたデュアスロン★世界選手権に派遣されたときのことである。取材があるから、秦野に帰ってこいと母にいわれ、あのときはバイク（自転車）で往復１５０kmを行き来しただろうか。持久系の競技は練習量が結果に比例すると信じ、仕事の合間に時間を確保することに必死だった。練習漬けの毎日だったので、迷惑に感じたと記憶している。母は図々しくもタウンニュース社に電話をかけたのだ。友人から勧められたと言いわけをしていたが。実家に帰ると、スーツを着た男性が丁寧に取材をしてくれた。

そのときに掲載された記事である。「毎月一足履きつぶしてしまうというシューズが、練習量の多さを物語る」と書かれている。脚色されていることは否めないが、シューズについてはこれに近いようなことをいった。

市民ランナー、市民トライアスリートでしかない素人のわたしは、雑誌の情報を鵜呑みにする。ランニングシューズのソールは５００kmまでしか持たないとか、履き続けると故障するとか書いてあるのだ。

当時、月間練習量はバイクが１０００㎞、ランは３００㎞くらいだったので、二ヶ月と持たない計算になる。そういうわけで、どんどん新しいシューズに履き替える。実家に帰ったときにはそのままぽいっ。次に帰ったときには、そのシューズは履かないと意気込んでいた。

競技をはじめたときはすでに二十五歳を過ぎていた。にもかかわらず、人との出会いに恵まれ、環境が整うにつれて世界が拡がった。メカニックを飯能の三上さんに、コーチ（元実業団ランナーで勝手にコーチとさせてもらっていた）、練習仲間も立川トライアスロン連合、ＡＲＡＩ－ＭＵＲＡＣＡ、あきる野市練習会など。そして、母からは精神的な支えを得ていた。レースを兼ねて一緒に行った石垣島、ゴール前で誰よりも大声で飛び回りながら声援を送ってくれた姿が脳裏に焼きついている。

二〇二〇年は一足もシューズを買わなかった。あのときのように使い捨てにはせず、大会があれば新調するだけになっていたが、小さな大会に出ることもなく一年が過ぎた。十五年前に実家に置き去りにされた白地にピンクのラインの入ったシューズは、今もそこにある。それを履いている母も歳をとった。郵便ポストまでも休まなければ行かれないと弱音を吐いている。年末に秦野に帰ることが叶わなかった。感染者が急増したからだ。

いつか母に聞いてみたい。買ってあげたワイン色の靴ではなく、どうしていつまでもそのシューズを履くのかと。そうしたら、こう返すに違いない。

「あんたが捨てたからよ！」

選手としては使いものにならないけれど、変わらない母のやさしさに救われているわたしがいる。競技は優劣のはっきりとする世界である。最も早くゴールに辿りついた者が勝者である。そのためには、切り捨てなければならないことがある。でも、切り捨ててはいけないこともある。

★デュアスロンとは、ラン１０㎞、バイク（自転車ロードレース）４０㎞、ラン５㎞の合計タイムを競う複合種目である。